

アメリカ西海岸農業見聞録

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村田, 武 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/24379

アメリカ西海岸農業見聞録

村 田 武

はじめに

昨年9月7日から17日の日程で、米国ワシントン州とカリフォルニア州の農業を視察した。これは、1992年秋から1年間、当経済学部 of 外国人教員として教壇に立ったレイモンド・ジュソーム助教授（現在はワシントン州立大学農業家庭経済学部農村社会学科準教授）と一緒に、3年がかりで準備した視察旅行である。北陸三県の大学・農業試験場の研究者や県職員で組織している「北陸農業問題懇話会」のメンバーを中心に編成したチームであった。

ワシントン州では、州の東南部を流れるスネーク川（アメリカ西海岸最大の穀物輸出港ポートランドを河口近くにもつコロンビア川の支流）の北に広がる小麦地帯から、州中央部のコロンビア川流域（Columbia Basin）、ヤキマ・バレーなど灌漑果樹・野菜園芸地帯を1週間かけて見た。カリフォルニア州ではサクラメント・バレーの稲作地帯を訪ねた。

ワシントン州の農場は総数3.6万経営、農地面積合計が1,580万エーカー、したがって平均経営規模は439エーカーである。全米の経営数が206.5万経営、農地面積合計が9億7,340万エーカー（1経営平均471エーカー）であるので、その2%弱の位置を占める。経営規模別では、1,000エーカー以上の大規模層が10.6%、180～1,000エーカーの中規模層が16.6%、50～180エーカーの小規模層が21.6%、さらに50エーカー未満の零細経営が51.3%である。小規模、零細経営のなかにはシアトル市近郊などにあつて、有機農業や産直などのとりくみを行なっている経営も少なくない。しかし、日程の限られた今回の視察では、米国内向けだけでなく本格的な海外輸出マーケティングに関わつて

いる中規模以上の経営に重点を置いた。

ワシントン州農業全体に関する統計は、以下の2つの資料によった。

Washington Agricultural Statistics Service, WASHINGTON
AGRICULTURAL STATISTICS 1994-95.

Washington Agricultural Statistics Service, WASHINGTON
AGRICULTURAL COUNTY DATA 1994.

われわれが訪ねた1996年9月中旬は、ウルグアイ・ラウンド合意にもとづくWTO体制のもとでアメリカ産農産物の輸出拡大が期待され、その期待に油を注ぐかのごとく、世界的な穀物在庫の低水準を反映した価格の高騰が穀物市場を1年近く賑わせてきた余韻の残る、夏場にピークを打ったシカゴの穀物相場にしだいに陰りが出始めたときであった。農家は、コストを補填できる価格で96年産穀物が売れそうなことに安堵し、1996年農業法——財政削減のために1930年代以来の生産調整と価格支持を結合した農業保護制度を廃止し、価格支持（不足払制度）を廃止するかわりに、7年間に限りいわば手切金として「一時払い」する——によって、前年までの不足払額のほぼ9割に達する「一時金」をボーナスとして支払ってもらったので、「助かった」というところであった。

「アメリカ西海岸農業にとっては、米国内市場は当てにできず、今後はますますわが国を含むアジアが死活的な市場になっている！」ということは何よりも痛感させられた視察旅行であった。ワシントン州立大学が州内に配置した3つの農業試験場のうちのひとつである灌漑農業試験場では、日本向けに開発中の新作物として、アスパラガス、ワラワラ・ネギ、ごぼう、レンコンの試験研究がおこなわれていた。以下は、アジア市場にこれからのマーケティング戦略の矛先を向ける現代アメリカ西海岸農業の点描である。

1. 土壌侵食と闘いながら輸出用の小麦を生産

ワシントン州の東端のアイダホ州境に広がる古砂丘地帯は、年間雨量が300mm

に達しない穀作中心の乾燥農業地帯である。アイダホ州境に近い都市スポケーンから195号線を70kmほど南下したところにある孤立丘ステプトー・ビュート(標高1,082m)の頂上から眺めた景観は、360度すべてが波打つ耕地である。レス土壌の古砂丘を残すことなく耕作している景観は、雄大であるというより、むしろ自然を酷使する不気味さを感じさせた。世界でも最も激しい土壌侵食地帯といわれる。とくに冬季に寒波で凍結した土壌が、暖い雨で溶けて流出する被害が大きい。したがって、侵食を少しでも防ぐために等高線耕作、小麦・大麦の帯条作付(ストリップ・ファーミング)、さらに三年輪作(小麦－大麦－レンズ豆)が一般的である。大麦は価格が安く収益性がきわめて低い、地力維持と土壌侵食防止のために輪作に取り込まざるをえない。ちなみに、小麦価格が1ブッシェル(27.2kg)当たりで、近年の平均価格が1992年度3.80ドル、93年度3.24ドル、94年度平均3.95ドルであったのに対し、大麦はそれぞれ、2.10ドル、2.01ドル、2.00ドルと半値を少し上回るにすぎない。したがって、穀作農場を専門的に経営するには最低600～700エーカー(1エーカーは0.4ha)の農地が必要であって、一般的には1,000エーカーは必要だという地域である。先にみた経営規模階層では、大規模層でなければ、この地域での耕作専門経営は成り立たないということである。最大規模の経営は5,000から7,000エーカーという巨大さである。

ホイットマン郡のコルファックスに訪ねたギルクリスト農場は、2,500エー



写真1 ワシントン州東部の小麦地帯

カー（その60%は借地）の経営である。借地については耕作者が生産コストの3分の2を負担し、収穫物の3分の2をもらうというシェア cropping である。小麦、大麦、レンズ豆を栽培し、さらに牝牛100頭を飼育して仔牛を生産している。毎年3、4月に生まれる仔牛は10月に中西部の肥育農場（フィードロット）に売却するが、価格が低迷しており、収益性が低い。また、農地に牛糞を撒布するのも、畜産公害問題でままならなくなってきた。

ジョン・ディア社製の大型キャタピラー・トラクター（350馬力）や、カルチベータ、プラウ（36フィート幅）、コンバイン（30万ドルする）、トラック（10トン）5台などの機械装置の大きさに驚かされる。コンバインの運転席は冷暖房つきで、ダンプカーの運転席よりも高かった。家族労働力は28歳の経営主デイビッド・ギルクリスト氏と父親の2人で、これにメキシコ人の雇用労働者が3～4人雇われている。

小麦の平均単収は87ブッシェル（1エーカー当たり）で、この地域では悪くない。ホイットマン郡の小麦平均単収は74.5ブッシェルである。問題は、1996年農業法で不足払制度による価格支持が撤廃されたことにあるという。1996年夏の穀物価格は在庫の減少で高値を続けてきたが、過剰が再燃して価格暴落となれば、価格支持の撤廃は一挙に経営を苦しくさせる。実際のところ、この地域で生産される小麦の価格は、輸出港ポートランドの取引価格で決まるが、われわれが訪れた9月中旬には、5.02ドルで間もなく5ドルを割り込む気配であった。農場に設置してある穀物貯蔵ビン（容量合計6万ブッシェル）に保管した小麦を、市況をみながらスネーク河畔の穀物集荷会社（ターミナル・エレベータ）に販売している。

ギルクリスト農場を見た実感は、土壌侵食に悩まされながら輸出用小麦——この地域で栽培される小麦はホワイト・ソフト種で主に麺類に適した品種である——の栽培に生活をかけるギルクリスト農場のような農業生産者に、安い食糧の供給を任せる世界はまちがっているのではないかということであった。

ちなみに、スネーク河畔の穀物エレベータからバージ（舢舨）に積み込まれた小麦は、輸出港ポートランドまでの550kmを44時間がかかりで下り、輸出業者であるカーギル社、コンチネンタル・グレイン社、ユナイテッド・グレイン社（日系）などに売られ、日本や中近東諸国に輸出されることになる。ギル

クリスト農場が集荷会社に販売する際の価格は、これら輸出穀物商社に支配されているのである。

2. ワシントン州は和牛生産のメッカ

ワシントン州立大学は、わが国が牛肉市場を開放するのを見越して、いち早く和牛に目をつけ、種雄牛2頭を日本から導入した。米国における和牛(現地ではWagyu といっている)肥育研究のメッカである。米国産のアンガス種などと掛け合わせてF1雑種を開発するために力を注いできた。州立大学の畜産学科付属農場にはF1が120頭飼育されていた。日本向けの肥育は、6カ月の授乳期を過ぎた育成牛を18カ月肥育して体重1,600ポンド(720kg)にまでするという。サシを入れない米国内向けは14~15カ月肥育で体重1,200ポンド(540kg)でとどめる。米国内向けの肥育牛の90%には成長促進ホルモンを使うが、日本向けについてはサシの入りが悪くなるので使わない。

「米国内の肉牛市場は低迷しており、日本向け肉牛は価格ではプレミアムが1ポンド(450g)当たり15セントとたいした額ではないが、新たな市場として重要である。この120頭は来年2月に日本へ出荷する。日本市場では、安いが質の良くないオーストラリア産牛肉に勝てると思う。巨大食肉加工業者(ミットパッカー)は小規模な肥育農家を相手にしないので、農民にとっては独自に牛肉の品質を改善して販売市場を見つける必要がある。大学付属農場の役割は彼等の経営努力を支援する意味もある。」と、付属農場畜産主任は語った。州立大学付属農場産和牛F1が、対日輸出の先頭を切るというのもアメリカらしいというべきか。

ヤキマの北のエレンズバーグの周辺に広がる平坦地は干し草栽培と牛の繁殖が盛んな灌漑農業地帯である。ここで和牛の繁殖を行なっているピティンジャー農場を訪ねた。

農場主のJ・ピティンジャー氏は、1992年に大分県別府市で開催された和牛共進会にも参加した。この農場で生産される500頭と、モンタナ州の知人の経営に種雄牛を供給して買い取る1,500頭を合計して、2,000頭の仔牛(和牛とアンガスのF1)を毎年生産している。全米での和牛生産頭数は5,000頭に



写真2 エレンズバーグ近郊の肉牛農場（和牛とアングスのF1雑種）

達したところだというから、この経営はまさに米国における和牛繁殖の先頭を走っている。生産した仔牛の販売先はワシントン州に進出している日系の肥育農場である。ピティンジャー氏が和牛繁殖に力を入れる理由は、州立大学で聞いたこととほぼ一致しており、「国内価格はすごく低迷しており、対日輸出価格もそれに引きずられているが、日本市場は高品質を求めるだけまだましだ」としていた。「O157や狂牛病が牛肉価格に影響していることは否定できない」と浮かない顔つきで、「日本市場に活路を求める」という彼の考えにわれわれはとまどうばかりであった。

3. ジュース原料野菜農場

コロンビア川流域（Columbia Basin と呼ばれるのは、フランクリン、グラント、アダムス、リンカーンの4郡）は、ワシントン州を代表する灌漑園芸農業地帯である。コロンビア川からの灌漑水路が、年間雨量100mmという乾燥地に豊かな園芸地帯を出現させた。この地域の野菜栽培の80%は、ジュースを中心に、冷凍野菜を含む加工原料用である。

その真っ只中のフランクリン郡ベイスン・シティに総合野菜農場であるジュデル農業（株式会社）を訪ねた。家族経営であるが、税務対策から法人化している。28才で独身のT・ウィズダム専務が管理する農場は、経営面積が1,500

エーカーあり、うち1,000エーカーの灌漑農地で、にんじん500~600エーカー、キャベツ110エーカー、小たまねぎ80エーカー、赤ピーマン25エーカー、かぼちゃ15エーカーなどを栽培している。残りの農地では小麦が作付けされている。野菜の多くは、ジュース加工原料である。キャベツのジュース加工前処理のために、加工場を別会社として併営している。

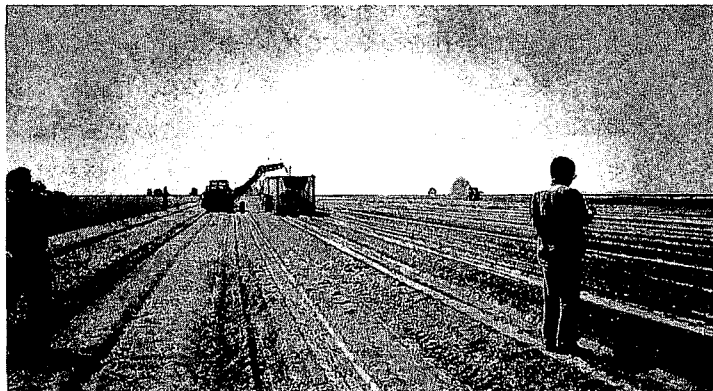


写真3 コロンビア川流域の加工野菜農場（小ニンジンの機械収穫作業）

赤ピーマンなど収穫が手労働に依存する作目については、メキシカン（メキシコからの移動労働者とメキシコ系住民）を雇用している。なるべく熟練した労働者を毎年継続して確保したいので、カリフォルニア州よりも少し高い6~7ドルの時間給を払っている。この時給6~7ドルというのが、今回の視察で聞いた農業労働賃金（手労働）の最高水準であった。1日8時間労働、月に25日労働として、月給は最高でも1,400ドル、年間賃金は1万6,800ドルに過ぎない。ボーナスはおろか、失業保険も年金もない。アメリカ農業がメキシコ人のひどい低賃金に依存している実態をあからさまに見せつけてくれる。

ジュデル農場のジュース原料野菜は、全量が日系企業1社との契約栽培である。「会社名は秘密だ」と専務は教えてくれなかったが、事務所には「カゴメ」の野菜ジュース缶が並んでいた。

野菜栽培は無農薬農業に近づける努力をしているという。肥料も加工場の残滓を利用したコンポストを使っている。雑草管理が問題になるが、収量は

落ちない。「多くの農家が無農薬化をめざすだろう。カリフォルニア州の野菜作は、すでに長期にわたり土壌汚染や残留農薬問題に悩んでいる。コロンビア川流域は冬季に寒冷で病害虫が少ないことも、この低農薬ないし無農薬栽培に有利である。水と土地が豊富なことも、この流域の野菜の評価を高めるのでないか。環太平洋市場は有望だと思う。加工企業は大型農家とだけしか契約しない。これまでは先進的な農家だけが輸出を経営戦略にとりこんできたが、いずれ生産者が輸出会社をつくってグループで輸出することも考えられる。というのは、農業生産コストは上昇しているのに、国内小売価格は低迷している。規模の小さい経営は苦しくなってきた。このままでは、小農は廃業に追い込まれるばかりだ。米国民は世界で最も安価な食料を買えてきたのだが、そんな時代が終わりつつあると考えるべきだ。」というのが、ウィズダム専務の意見であった。

われわれが何気なしに飲む野菜缶ジュースの背景に、このようなアメリカ西海岸野菜農家の競争があるとは正直のところ無知であった。

4. アジア市場に向うりんご

コロンビア川流域の南、リッチランド市でコロンビア川に流れ込むヤキマ川の流域(ヤキマ・バレー)——ヤキマ郡、キティタス郡——は、世界最大のりんご産地である。この地域を中心に、ワシントン州のりんご生産は、1994年ではりんご園15万エーカーで、280万トン、うち200万トンが生食用、80万トンが加工用となっている。

さらに、この州ではさくらんぼ(1万4,500エーカー、8万トン)、なし、もも、ぶどう(ワイン)、工芸作物でホップ——ちなみにワシントン州は全米最大のホップ産地であって1994年には3万375エーカーで2万4,600トン生産されている——、ミントなど、さまざまな園芸作物が栽培されている。ここで、りんご経営と、りんご集荷販売会社(フルーツ・パッカー)——中小パッカーはいずれも自社のりんご園を直営し、それに自社以外のりんご農家から委託販売を受ける——を見た。

プロッサーという村を訪ねたオルソン兄弟農場は、その名前のとおり兄弟

のパートナー経営の園芸農場である。1,800エーカーという大規模な灌漑農地に、りんご(250エーカー)、ホップ(500エーカー)、ぶどう(すべてワイン用で300エーカー)を主作目としている。われわれが訪れた9月中旬には、りんご(ゴールドデンデリシャス)とホップの収穫中であった。りんごは、デリシャス系に加えて、近年ではガラとふじを導入している。ふじの栽培面積は25エーカー(10%)である。

雇用労働力は通常で50人、収穫最盛期には200人になる。ここでもそのほとんどはメキシカンであって、資金は時給5.75ドルということであった。これでも労働コストが経営を圧迫するので機械化したいところであるが簡単ではないという。



写真4 ヤキマ川流域のりんご農園(メキシカンによる収穫作業)

生産コストは1エーカー当たり1,200ケース(1ケースは40ポンドつまり18kg)の収量で2,400ドルとみている。したがって、1ケース当たり2ドルのコストである。この1ケースについて、生産者は集荷販売業者(パッカー)にパッキング料を7ドル支払わねばならないので、最低9ドルの生産者価格を1ケー

スについて期待するというのであった。われわれが訪れた時期には、12ドルが市況であった。この状況では、生産者にとってはすべて生食用に出荷したいところであるが、現在80ないし85%が生食用出荷である。全米ならびに州内の収穫量をみながら、りんご生産者協会が決める加工用比率が法律で強制力をもっている（1937年の農産物出荷協定法によるマーケティング・オーダー制度という）。豊作で加工用に廻される比率が高まると、りんごジュース加工用は1トン当たりで安い年には70ドル台（18kg当たりではわずかに1.26ドル）とひどい価格になり、全体としてコスト割れの危険がともなうからである。ちなみに、州平均のりんご生産者価格（1トン当たり）は、生食用（Fresh Market）が、1990年が422ドル、91年526ドル、92年386ドル、93年358ドル、94年348ドルであったのに対し、加工用（Processing）は、それぞれ128ドル、206ドル、117ドル、71.3ドル、75.6ドルであった。

C・M・ホルチンガー果実株式会社は、自社のりんご園（面積は企業秘密とのこと）をもつとともに、200戸のりんご農家からの委託販売方式でりんごを集荷し、年間300万箱（自社園比率20%）を出荷するワシントン州で第5ないし6位（全州のシェアが4%）に位置する会社である。この会社から出荷されるりんごには“Royal Purple”というブランド名がつけられている。工場に1箱875ポンド（約400kg）入る木箱（ビンという）で運び込まれたりんごは、水洗され、重量と色で選別され、ワックスで輝かしく化粧されて——スウェーデン向けなど一部の輸出を除いて、ほとんどのりんごがワックス処理されている——箱詰めされ、ただちに出荷されるものと、附属の冷蔵倉庫に貯蔵されるものに分けられる。ただちに出荷するか、それとも貯蔵するかは、りんご農家が市況をみて選別する。したがって、パッカーは、選果・箱詰料金を確実に得る一方、生産農家は市況を自ら判断し、そのリスクを負わねばならない。

輸出比率はヤキマ郡全体が約50%であるのに対して、この会社の輸出比率は60~70%にたつする。とくにアジア向けが多く、台湾、香港、タイ、インドネシア、シンガポールなどへの輸出が伸びているという。このアメリカ視察の1カ月前の8月に、私は、タイ南部の果実のたいへん豊富なナコンシータマラート市の果物店に、地元のマンゴスチンなどと並んで、このワシント



写真5 りんご選果場

ン州産レッドデリシャスのダンボール箱を見つけて驚いたばかりである。

この州のりんごの輸出先としてアジアのシェアが高まっていることについては、もう一つ訪ねたワシントン果実野菜会社でも聞くことができた。この会社のR・プラート会長によれば、りんごの輸出先は品種毎に異なっており、レッドデリシャスはメキシコが第1の仕向先であるのにたいし、ふじはその大半が台湾向けであるという。ふじの導入がアジア向け輸出を一段と伸ばす武器になっているようだ。

りんごの対日輸出についてくわしいF・スカーレット氏（ワシントン州のりんご・さくらんぼ生産者の協会である「ノースウエスト果実輸出業者協会」の専務補佐）によれば、日本はすでにレッドデリシャスとゴールドンデリシャスの2品種について輸入を解禁しているが、害虫の駆除についての検査が厳重であり、農水省の検査官の圃地への受け入れ経費、燻蒸費用まで生産者が負担しなければならないのでコストがかかる。現在この「りんご対日輸出プログラム」に参加しているのは集荷業者5社にとどまるということであった。しかし、うえに見たように、ワシントン州産のりんごは、ふじを先頭にアジア市場にひたひたと押し寄せているとみるべきであろう。

5. カリフォルニア米の価格は生産コスト割れ

カリフォルニア州のサクラメント・バレーで稲作経営を訪ねた。このアメリカを代表する稲作地帯では、大規模農家は1,000エーカー以上の経営規模で

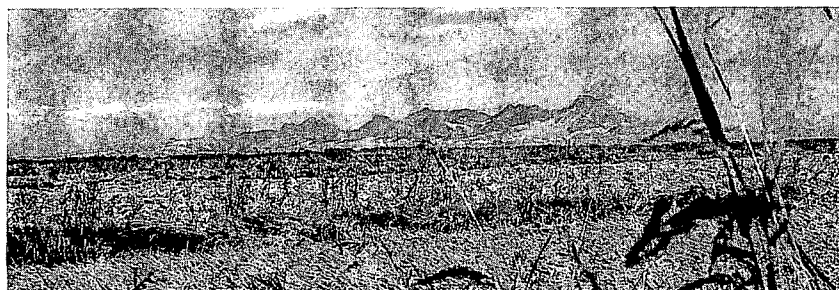


写真6 サクラメント・バレーの稲作地帯

あり、稲作とともに小麦・とうもろこし、甜菜、加工用トマト、さらにアーモンド・くるみなど果樹を含む複合経営が基本であるという。

稲作地帯の真っ只中のビュート郡に訪ねたリンドバーグ農場は、2世代の夫婦が働く家族経営である。ビュート郡の米生産者協会（Butte County Rice Growers Association）のメンバーである。1942年に父デニスさんが200エーカーで始めた稲作は、息子と一緒に900エーカー（うち借地が300エーカー）にまで拡大した。この規模でトラクター4台、ハーベスター2台が必要である。播種と施肥作業は作業受託会社の飛行機による作業に委託している。ハーベスター2台で1日に収穫できるのは35～40エーカーである。うまく収穫作業をみる事ができたが、2台のハーベスターと収穫した籾を運ぶトラックがセットになった作業は、「すごい」という一語につける迫力を感じさせるものであった。

栽培している稲の品種は中粒種であって、収量は1エーカー当たり8,400ポンド（乾燥もみ重量）というから、1haあたりでは9.45トンと相当に高い。販売は「米販売協同組合連合会（Associated Rice Market Cooperative）」に委託している。60%が国内向け、40%が輸出である。農家手取価格は96年9月では精米100ポンド当たり9ドルであってやや高値であるという。ところが1エーカー当たりの生産コストは700～800ドルと考えられるので、精米100ポンド当たりでは10.4～11.9ドルになる（精米の重量を乾燥もみの80%とすると1エーカー当たり収量は精米で6,720ポンド）。やや高値ではあってはコスト割れの農家手取り価格である。リンドバーグ氏によれば、この9ドルに

補助金（不足払いの廃止の見返りとしての一時金）2.25ドルが加算されて合計11.25ドルになるので、経営が成り立つのだという。息子の妻もトラクターやハーベスターを運転し、雇用労働力は3人に抑えている。

「自分が稲作を始めた1942年には100ポンドの米が3ドル、その時代のはがきの切手が3セントだった。今、その切手は30セントになっている。米価は30ドルになってよいはずだ。」と、わが国でもよくやる米価水準比較をリンドバーグ氏がやっていたのはおもしろいところであった。さしあたり米価がほどほどの水準にあり、一時金が去年の不足払金のほぼ同類に近い水準で支払われて赤字にはなっていないところから、まだそれほどの危機感はみられなかった。しかし、いずれにしろ4割は輸出という販売事情のもとで、「日本市場に輸出されてくる米国产米は生産者にとってはコスト割れの価格でしか売れない米なのだ」ということを見逃してはならない。

(写真はいずれも筆者撮影)